

## 2) ふれあい自然体験活動(中学校班)

開催日時 平成1311月2日 金曜日 15時40分~18時

会場 302講義室

助言者 教育学部附属中学校 石岡靖仁

弘前市立中央公民館長補佐 泉谷 洋

学生 斉藤めぐみ 小岩真弓 中軸賢治 今良太 葛西亜紀 竹浪紗弥子 津村英世 山口真理子

阿保寛子 樋口良

(1) 司会者あいさつ 樋口 良

(2) 助言者あいさつ 谷岡靖仁

子どもの数が減っている。社会教育の子ども会に関わってきて、子どもの人生・生活を引き受けて徹底してケアする大人が足りないと感じている。このことが、いま私が活動している全ての教育活動の問題意識となっている。

教員を目指す学生として、自分なりの目的意識をどのようにもっているか考えてほしい。したかったことと現実にしたことが違っていてなぜだろうと考えることが、次の活動に直接つながっていくと思う。

スタッフ(少年教育指導員)の関わり方は「生きる力」を子どもたちにつけることにある。「生きる力」は多岐にわたるが、私は1つに社会的人間関係をつくる力であると思っている。子ども会研修会は社会的人間関係を作る練習の場である。子ども会研修会は横のつながりよりも縦のつながりを重視している。ここでは年齢の違った人達の集団を意図的に作り出しており、子どもたちに非常に刺激がある。そのような環境の中で、子どもたちに「生きる力」をつけることを指導員は求めていた。あらかじめ学生に相談していないが、そのようなプログラムを指導員は作っていた。スタッフはそのことに責任をもっている。

自分なりの目的を果たすことができれば成功だと思う。子どもの楽しそうにしている笑顔が忘れられないというが、それが目的だとすれば、それを成し遂げたことはすばらしい感謝だ。それだけでも成功だと思う。

(3) 学生代表あいさつ 中軸賢治

(4) ビデオ鑑賞

(5) 学生の感想

司会：一言ずつ感想を言ってください。

斎藤：中学生や社会人とのかわり方がわからず、何もできずに帰ってきた気がする。身の置き場に困ったし立場へのとまどいがあった。

小岩：たくさん課題を与えられた。手をつながない中学生にきついことを言ってしまった。指導員に迷惑をかけたと思う。小学生は班付き、私たちはスタッフの役割で、最初は私達の位置関係が難しかった。キャンプファイアなど最後のほうでは思ったようにできたと思う。帰ってきてから最初なじめなかった原因など反省することがたくさんできた。来年の2年次学生がこの授業を受けるときにスムーズに活動ができるようにするためにも、この討論を意味のあるものにしたい。

中軸：立場がわからなくて困った。後になるほど子どもたちはこころを開いてくれた。自分も頑張ったし、行って良かったと思う。

今：このような活動に参加するのははじめての経験だ。最初子どもたちにどのように接してわからなかった。しかし子どもによって話しかけてくる子もいて助けられた。活動の運営に参加したことは部活の運営にとっても役立っている。そのような意味でスタッフ会議はとても重要なことだと思った。

葛西：研修中自分がどんな位置にいたかすぐくわからないで戸惑ってしまった時間が長

かった。中学生のみなさんとうまく接せられないのは自分がスタッフの立場だからとその時は思ってしまった。立場はどうあれ、もっと積極的になればよかった。研修会が終わって充実感もあったが、なんでうまくできなかったのだろうと自分を否定的に見てしまう傾向にあったが、本日、参加した中学生の感想を聞いたり石岡先生、泉谷さんの話を聞いて救われたような気がする。

竹浪：言われたことは良くできるが、いわれていないことに臨機応変に対処するのが自分の目標だった。‘記念樹’の合唱を通して割と中に入って一緒に歌えたので自分の中に収穫があったと思う。私達は中学生からみると先生かも知れないが、大学の中にいれば生徒なので、上下の関係なのか横同士の関係なのかあいまいな立場にとまどった。収穫もあったが反省点も多い。

津村：どのような活動なのか事前のミーティングでは聞いていたがイメージは行くまでつかめなかった。子ども会というのが私の住んでいるところにもあるがそれほど活発でない。子ども会という独特の世界に触れたのは初めてで、歌やおどりがあってびっくりした。自分ではよいと思ってやった行動に指導を受けたりした。その後、社会人が私達をどのように見ているか気になってしかたがなかった。先生同士の意見の不一致がみられとまどった。

山口：体験活動の話し合いの段階から参加した。はじめての経験でわからないことばかりだった。最後まで積極的にできなかった。研修中は楽しかったが、反省点も一杯ある。高校生リーダーの力に負けていた。力不足だと感じている。指導員から言われないと動けないことを反省した。その場でできることを見つけ出さないとお客さんになってしまう。できることを探すことが大切だ。

阿保：自分の位置がつかめなくて困った。指導員の手伝いをしているのが実態だった。中途半端でもどかしかった。現場の先生から「自分から話し掛けて行かないと。子どもも人見知りするのだから。」と言われ、そのような話が聞けてよかった。今度また参加して成功させたい。

樋口：岩手山青年の家に行って2つのことがすごく勉強になった。1つは社会人の方と話しができて、一緒に考えることができたことだ。教員を目指す学生として、現場の先生の率直な意見が聞けてよかった。上からの目線が参考になった。教師を目指す人間として自分が本当に子どもが好きかといわれると本当は苦手で自分は教師に向かないと思っていた。小学校専攻なのに中学校班に入れられて班つきでなくてホットしていた。実際は自分が気にしているのは周りがどう思っているかであって、本気で子どもに接すれば子どもはその分だけ返してくれることがわかった。ボランティアで障害のある子や小学生とふれあったこともあり、岩手山に行って子どもの笑顔が印象的だった。岩手山に行って子どもが好きになり教師をやってみたいと思うようになった。

## 討論会

司会：質問や疑問に思っていることが沢山あると思うので気楽にして見てください。

石岡：さっきの感想の報告の中で決定的に足りないものがある。何だと思えますか。例えば濱部先生はクラフトの係、鳴海先生はナイトハイキングの係でそれぞれ責任をもってプログラムを組み実施する係だ。大学生の担当はゲームだった。

皆さん悩んでいたことと関わることだが、責任担当以外の時間をスタッフは何をしているかだ。スタッフは担当したプログラム以外のプログラムを実施する際にはそれを助け、支えることを任務としてことが多い。運動会の世話を鳴海先生にお願いしていたわけではない。学生のスタッフには伝わっていなかったかも知れない。私が心の底で皆さんに求めていたのは全く指導員と同じだ。

泉谷：大学生の役割が不明確なままに活動に入ったのかなと思う。スタッフ会議の中で大学生の意見を聞きながら大学生の役割を決めていこうということであったと思

う。子ども会研修会の目的は、子どもを対象として、子ども会のリーダーを育てることや子ども会に関心をもってもらうことである。これに対してフレンドシップ事業の方は研修会の場で子どもとふれあうことであるので双方のねらいを満たすことはむずかしいことだったのかも知れない。小学生班のスタッフはふれあいが必要だとのことと、大学生を班つきにした。そっちはそっちで合はる場合で高校生と大学生の役割分担が問われていて、話し合いで役割分担を決める必要があった。中学生班の方はスタッフという役割があってその中でふれあわなければならなかったが、積極的にできれば場はあるのだからふれあうことはできたと思う。公民館職員、少年教育指導員、高校生、大学生、講師がいてそれぞれ役割がわかっているつもりでも大学生には役割ができていないということになる。すべて問題がなくて活動に入っているわけではない。活動の中で課題を見つけながら一つ一つ解決していく他ない。研修生の感想の中で大学生については述べているのは圧倒的に小学生が多い。中学生の場合は大学生をやはりスタッフとして見ていたためだろう。

山口：ゲームの時間は中学生の最初の活動だった。30分で担当した。1つめのゲームは自己紹介ゲームだった。自己紹介のあとポーズをとって皆もそのままポーズをとってまねることをした。次は伝言ゲームで班毎にした。ある言葉を背中に書いて伝えるゲームだった。ゲームが終わるころには皆リラックスしていたと思う。仲間つくりのレクリエーションとしてはよかった。

今：最初は別のやり方を考えていたが準備不足で急遽変更になった。背中に書くのは簡単なことだったが実際は間違いが多かった。間違えて盛り上げようとした。

樋口：準備不足は自分達の役割に責任をもっていないことだ。

斉藤：コミュニケーションという意味では、身体に直接触れることでよかったと思っている。神経を集中させるために静かで、それは真剣に取り組んでいる証拠であってよかったと思う。

学生：読みきれていないのはスタッフとして反省している。1問しか正解がなかった。自分の順番が来るまでしばらく時間があってその間話ができ、短時間だけどその子のことを知り得てよかった。

学生：緊張を解くにはよかった。

学生：臨機応変に変えられてよかったと思っている。

樋口：石岡先生いかがですか。

石岡：100点満点とすると評価は20点だ。自分は得意だから。200人や100人相手でも一人で30分はもてる。爆笑を呼び、数倍も盛り上げることができる。1つは技術的な問題だ。高校生はもっと盛り上げただろう。キャンプファイアのあの盛り上げをゲームでも盛り上げることができる。私自身のテクニックでいえば、カタカナ2文字で十分楽しめる。例えばイスだ。やってみないとわからない部分もある。梵珠少年自然の家でやった経験を生かせたらと思う。

今：大学生と高校生がはじめてであったのは7月のはじめであり、高校生との関係がうすかった。顕著にでたのはキャンプファイアの時だった。スタッフ会議とは別に葛西と樋口とで4、5回会議をもった。最初のせりふで終わってしまった。高校生との関係を密にすればもっとうまくできたのではないかと思った。高校生は全部アドリブだった。

石岡：研修会で話し合う機会があったのではないか。

小岩：自分から高校生に求めなければならない。

石岡：大学生のスタントの役割の首尾と高校生との関係はないと思う。

小岩：キャンプファイアでも高校生との協力が問題意識としてあった。

学生：高校生がすごくてとてもかなわないと思った。教えて下さいという態度があればもっとコミュニケーションがとれたと思う。

葛西：ダンスや歌がわからないので、高校生に任せる他なかった。盛り上げる役目に徹すべきだった。

樋口：高校生にダンスを習うことになって壁ができた。もっと練習しておけばよかった。

学生：参加してみて、スタッフでありながら歌もダンスも知らないのが問題だ。

泉谷：高校生は研修会に参加してあこがれてリーダーになっている。彼らには積み上げがある。

今：自分から求めて行ったのでしょうか。

石岡：自主的な意欲があれば出来る範囲だ。積み上げなければならないものでもない。

熱意があればできる。今回のあれだけ手の込んだキャンプファイアは初めてだ。

今回行ったスタンツファイアは本来台本がなくてロールプレイであり、好きな役目があれば飛び込んで演ずる性質のものだ。事前の工夫があればスタンツファイアを超えたすばらしいものができる。それはスタッフと高校生の打ち合わせがあってできたことだ。レクリエーションでできなかったとしてもこのようにできるものが一杯あった。

樋口：時間もなくなりました。最後に泉谷さんに講評をお願いします。

泉谷：研修会が無事終了したのは学生の皆さんの御蔭だと思っている。今回討議の中で様々な問題点が指摘されているが、学生自身が解決すべきものも多々ある。子ども会は子どもや会を支える大人がよりよく生きていくための場であり、皆が関わりあって成長していく場だ。皆さんが関わり合いをもちながら自分のことのように熱心に討議していく姿を見てああいいなと思った。是非この経験を生かしてほしいと思います。

樋口：どうもありがとうございました。